崇武新日記傍注

下

左傳昭公元年
先王之樂所以節百事也故有五節杜預註五聲之節。又本朝雅樂詳見後補

紫式部日記傍註下

十ノ巻 目ノ一

むせちのあさまよりいろ。侍従宰相行成卿まひ始のほうきくなと
つゝいと。右宰相中将の髪長のおきちにゆ屋ゆ。ゆしきほう
ゆ。ゆしきそうとこ一ゆひまゆものゆしくい葉
梅の枝をゆ。桃ゆゝとこゝゆゝゆゝゆゝ。ゆゝゆゝ。ゆゝゆゝ。

傳付隨舞姫女房也詳見後補

ひさおりて（甚面）てりけり。むつひ（脂燭）をくさめくらかしそ（昇）へいはんひさおひ（覆）ものとも（引）をれとおほくこのうしさて
おなしことそ見るとうんとれるひいつるもまいむ○ふさ
うなりとゝのおそれ（傳注上）（高階業遠）（朝臣）ばさあり（唐）たりうさあ（衣）
やこのふもものふまをしを見つるしうるゆ。さめ
うちあうう（動）ゆさもを（窈窕）ゆるゆるもそ見ゆ。夜上
人ゆうとふりてうづく。こゆさまうへ（今上）もゆうて粉行て
ゆらんを夜もものひくやりさうり（外）（遣戸）おりもせ
ゆ。ゆ。ゆせうるゆさうなりさられゆけうと
ひうくくゝのひいとゝやひうふむうくゝをひゝへう（閑）（綺麗）
おうゝをとけうあうう。右宰相中將（兼隆卿）のめ〳〵さかうゝハ

楢澄付隨舞姫下女也詳見後補

麦春當亮とハ藤原宣孝の男隆佐なり是紫式部のあす継子なり

ふうしうりひをまゝのかゝうゝのひさうさゆうう
ゝをひうりと人ゆうゝゆむなうしゝそゆ芳宰相乃
ゆりひゆうゝゆいう光うゝくゆむゝとなうゝ（傳）つさ十人（今句）（行成卿）
あうう又ひう（相）ゆうゝうすおうゝうしてゝゆゆゝうゝあの
ゆけうゝゝゝゆうゝゆ（顔）（顰）ゆうゝゆ見ゆゆうゝゆ見ゆ
ゝゝゝ

乃ん（試）乃ん乃ん（散米）ま散ハうらまたしの（異）ぬ（憂）ぬうきれハ
まつ（炭櫃）むとおりひてぬ
と。をひ（藤原近光）よねて。（責立）
乃て（麻）ゆをとゝ
かうぎをぐしてハ
こせ
いふくるしうとんと
あ
ありて。いめ
ありこせのあ

雲(曇)のれ。すくうくもりなくぴろは…しあ(扇)ことを
らくくしくくりてせぢ。そこくくれこくくさちれ立ちまま
ふぶけてもあるぬ(こと)身乃かとんりらるといひあり。
人なおとくくしとあくくそふこちもいふわくくとくんと
あいなくくうくいてれうくくるくこそ。丹波てのうこ
れうくはのあ(青)ぢいち(白)くくつ(櫟)むこれかざこ(汙)あくくしとこひ
ちに。苔(行成卿)宰相のうくくつ。あいろとう弱てきもつ(仕)(下)の
くくこあくくあ(蒲)ぢえびうあ(蒲)ぢえてりゆくこ(彼)ゆくくくく
うくはのくくちも。ひとく(獨)りはいとまげよはれてを。宰相の
(兼隆卿)中将はゆくくはいとそひやうにうれともおくくこれあ(漂)れ
おこえ。くういぐきはふ(表)(著)くくなりがざこはあ(なり)中ふ。

とくりはあ(蒲)くえびうあ(蒲)ぢえてりゆくこ(彼)ゆくくく
ふあるこ(艶)くくあのいろあひはやあくと下仕のいとこ(艶)が
ちくれくあふこくとくて。六位のくくくくくとくふ
ふぢあ(艶)ぢやくくこそ。艶こくくこあくくあ(艶)ぢあくくはれ
くくこあ(艶)ぢ。ひとれくくとくれくくやくくますて。いあねくく
あくくい。又くくてもくくこ(吟)ぢ。ひあくくいくくりまくくこくく
くくまでくくいてんとこはあくくりあくくきくくくくくやはちくくとこ(目)ふ
ひをあくくまくくきくくのはくくくくく

ゆしくおかゆしいめとまることもまいのるくりきを。
侍従宰相のめきちはりの（行成卿）のすの見ように
ハうなり。さて（立）ちとのうちとにうとくとこれ
れくもうゆ人のわいふこもやのうこゆ乃女沛
のいうこよ。たゝ京。むこと（部）といふ人なんぴと申れてまこを
うと宰相中将。むこ（兼隆卿）うをそうう法伐一表の
かひ（結）くうひすてゆうこ。ゆんこ。ゆりこなん。
京京と源かねもとこ中ようをこりこと物乃（侯）ふうありて。
ほこうこうう人ぷおうしうをおり考うゆをといひて。
いうこ法ふまほうこ。ゆこふうくたうてゆあうこ
きんうちをうう伐ゆうこうゆすてやいいてうゆいうこ乃ふ

日蔭の事詳一見後補

とおりふうんとあうハうんのうこておゆ（遊）へはあかうこと
あゆこうこふらふ中ようほうこ（菜）らいつくうこ。そこ。をうこう
ふうこあうこ。こうこうきんやハこゆあうこよ。ゆくきてひけ（日蔭注）
をゆあてうこいうこくこうこ（髪）（櫛）うこうこ。ちうこものふこうこく
ほうこくとゆひこへこうこ（結）（副）うこうをこうこすこうこ（火）（過）ひこよ
ワこうこくこ。ほうこ（及）ほうこなんゆ伐くこうこと。
こうこのほへこ。ゆこやうこのこうゆあうここゆこ。ゆゆゆこ
こうこうこうここゆこ。ゆこ（幌）（帷子）（香）
ふこうこ（割）（切）こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ
こうこ。たゆ（大）（輔）のゆこうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ
おゆこうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。

れまへ人ハおのくハたうしきさ海ハ　しでおのみさ
おとゝあまもこしそとの給　宣　給すれとおとゝ
もこのさ海ハあらさうへしゝ　日さとつゝ給すてゝ
にきしこさしませ給へさふも侍ら人ハ　ゝ　日さ
ゝにしそこさゝえさせそ給ふるまきつ給ひの
人してこ重中納云の出ハ　出ハ　のうち　左京元　君　きしん
とたうやふ　ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゐしまれとあるよ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝりのまゝ　入　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゐくあるふなる　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

小忌　晨朝　きこ　相　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

うちとけひしうつとめくうられおほいとのくに随身。
このとのこすいしんよりとせてぬるるつうしこと
のかつふちろこれうしたこと成とてうかこと
てちんのくに白う袴のかうういなしつつひの表しをんうを
沉 髪 撥 鬢 撥
ぬいこきまし紙ちてうりこと成ふてこにあてこいうちいく
ちうハ日うけの巻ものありこ。文字 手
よのんうひてもおるうるとうしてあやうし
ん大臣えしハかのおくれ大臣えとと
ん之ぬ袴かうくくくくしくちるの袴へうなりうりとそ
計 無 歳
きこ侍ちるるううしたくまつこと。ちうとおうこうく
しうこそのくうこをはうのかりて物ちらんをはうひ
孟
表花かうてつくくくしくおとるひるへうるとくくの

あとこのすの九日
ま拾くまうこと
ぬうハ見ハ見弘
三年十二月九
日まめ。ちし

令婦ハまひ人まハめとと見やこをこうちはりりくそるこ。
ハけのいこるハ。御社ハこうしうしのけすそうこりまいれ
御神樂
ハ。ハうくなこことはまこうこりなうこ。人名り去年ハ。
いとつくくしきなうしぬこるくれとろへうふう
まひうこうきうしぬ人乃うへなれとおくれりおりひ
ま之へうこことおはくはう。ちこをこのサ九日にもしめて
注立
まいりしもあうひのおとそうこ。ぬうこくも夢ちり
うとはうこうるとおりひいつまハこうれくうこるれま
疏 數
うもうくはしの乃ハはくやとおはは。表いうふをに
ちりは物いこふおくこうこうれこおま人にもはいうこ。
ハはそくるうちはしうにぬ人なうへけうちはうう

弘仁内裏式曰
中務省率侍従
内舎人大舎人等
各持挑弓葦矢
陰陽寮陰陽師
齊即執糸具方
相一人著假面
黄金四目其衣
朱色裳右執戈
左執楯侲子廿
人同著絁布衣
朱袜額英入殿
庭列立

ハ。狂いとなきとひとなりきりぬとうまハいまは祐分
きりの後ぬもいとと死くりの志をうをとぬめ
くいひねるとうて履
ハ。ひとりて世ふきをくのとたんのうちよずきもくさ
とそひとりてうつこりれ表ついるハいとくくく追儺法士疾
ぬしハくくろめつをるとろれくくひもすくてうち齒黑
うけるすに。弁乃尼法うそすのかうして婦ハ。童女名
たくくく

式部丞とけあり。そまいりてさぶらふ。
とも。さぶらひとりさしいまさぶらはれくあるべくあり。
えびのひねるもあり。うつぶつひとりいと
しうれうしうしてゆ。おさあるあるまうと
いてうせて。この人々まゐりたいちはうもくはこうり
きはしてうきもおくてあるとも。ちかうすこはうすはを。
おうなりさるのうれうれいとしいとしいとしいと
志あるを。正月一日うん日なりうそしてうるのはいうさ
餅
りしのことまうめ。三日ゐはうのかりせりはこと。この
はまうのひはは太納云乃表内うもくはいうもの日はくまあ
蒲萄
えひうめうあはあるるあるるるるるの表二日うりうの

寛弘六年
坎注上
裸
納
衣
差
淵
戴
紅梅

薄色ハ紫ノウスキヲ云

ありのかいわりまこれ書の表のうへ衣のいろをうらも三日
ハかりあるのうへうへうのうへはをうへのおりもの。
うのうはこうえうひはくまあ井ハあるふ。紅梅ハ日ハ
これとあるまなとまいのことなりのえさすうの山吹乃
あうすすうぶいうすあるつのあくとひとひ
六
まはうはうとうこれとそのとうはうさはとふうはは。
さいしやうの表はもうしとりてこのいはさをうは
はうにはつこそまうのかりうまあるの三人あ
くとまはつあるあるるあるうちうう七色ひとひ
めひうのくまはつうはおるいろのうりんの
樹
あうんうとうえひうめうれりんはうきのをんとおり

皆
綾
裳
注上
薄ー
佩
剣
固
文
檀

すぢめひうちうえ（かどくし）。三（かう）の君。あく乃
う衣。ゑ（こ）のゐんとおりうくちぶ（ぶ）ぬいとかゝめいうう。
いとおゝきまかこ（ゝ）ゝとつ〇（ゝ）ゝうけくちひまして（て）やう
ぶいりてゐ（ゝ）らうくしくれうしゐ（ゐ）きたらしたやとふ。
脇
ぬくらゝ（ゝ）ゝ人（ゝ）のゐ（ゐ）いとこまりにあやひれうしゐ（ゐ）きなり。
顔 最 濃
大納言の君ちいとうやうにちいうしとふ（ふ）ゝこゝなり
人のぢうう（う）ゝうくしゐ（ゐ）きふ（ふ）ぢくとこ（こ）ゝ肥ぢうう（う）ゝ人（ゝ）て
いとゝきひやうに。髪こゝけよ三とんいうゐ（ゐ）まりうず。すそ
つゝうんゝ（ゝ）ゐ（ゐ）くゝそす（す）（て）あるゐ（ゐ）ぬ（ぬ）ぢくふ（ふ）まりにうつて
良 敷
ゝうやをいとらうくしくゝ（ゝ）ぬ（ぬ）てゐ（ゐ）ゝ（ゝ）なとらうたきよ
麗 宣 旨 龍
ふ（ふ）ひうかりうぜんゝ（ゝ）の君ハ（は）ぢ（ぢ）ゝ少やけ（け）ゝ（ゝ）のぢ（ぢ）ゝはそやうう

ゝひつて（て）ぢ（ぢ）ゝれすゝこまやうふ（ふ）ゝこゝうにくぶ（ぶ）ゝうう乃
ゝ君ゝう。一尺（ゝ）ゝうあゝ（ゝ）ゝうゝ（ゝ）ぢ（ぢ）ゝ（ゝ）ゝうゝ（ゝ）ゝけよ。
妙
ゝこゝうをなくあてなるゐ（ゐ）ゝ物ゝう（う）ゝ乃ゝ（ゝ）あゐ（ゐ）ゝこ
ゝゝいぢ（ぢ）ゝれゝ（ゝ）ゝゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝうゝ（ゝ）ゝひやゝ（ゝ）ゝゝ（ゝ）ゝゝ（ゝ）ゝ

しらてぐらつきにくつしけさもあわひやうなることと
そひくりてあしたいとえ(美)くしくかるやうすそんし
ぬるくふぐあもいとめやすくくふうつくきわうぢきいと
ものうきおそひてうこ廿将のあいぢこくろとあくあて
にかまあうしう二月ハうけきてうけ柳のうまきうぢやう
さいふとうつくしけよぢてるしふくぢんかともとろ
ふとありひとるかことなきやうにものつくとちぢいとうを
くらしひあまうえくうこうきまてこめぬるしてりぢくうこと
かこ人あしあはよりてるしいひくるくあうこぢやくく
うれはありひいりて所ととうるのひけづくあ(うに)とうり
ぬきあはい強くうるあまうるうちめうをなるこぬの円俗そ

(注巻十一巻十二)

長 立 美 歟 腹 黒 籠 影 護

又いとこうきをなるくあけたちひとをなるうぢすう
こあすくつぢいともものくしくぢうめいうやうふまそ
あまうにとうたておうしけのとと見とあわうふとあきー
きふそひくくしくるうたくこうかしてあれあくひきあさ
ぢ人はきくれうかうちうつぢんうこ額ぢいつこかとそ。
あるわこうけと見てくるやふあいこやうづくこうそく
けうにすてるしてんこ面ゆくもめやとくぢはいとうい行
うこあはもうこうめこいうてあくぢとしそあしめく
人乃様めめしにちつこを人うくなうこえんううしめくかこ
ハ形ぢ式部のおりくハむとうとなうぢいとふくうきこすき
くぢこさう人のあいところくまわひてぢやうぢとこあに

(注巻十一巻十二)

最 脇 愛 敬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

楊子 白粉 柱 調惡

人のまもるべきかたちもこそ（皆）いとをろかなれ。ひさくのかもこそ（此）いとをろかなれ。ひさくのかもこそ（肘）いとをろかなれ。ひさくのかもこそ（髮）いとをろかなれ。からハ（車痛）ものはなれ一人ゐたりてあらまくもこそ。ものはなれ一人ゐたりてあらまくもこそ。ものはなれ一人ゐたりてあらまくもこそ。

方さはれてこそ侍らめ。ものうらやましう。春院うりいそぎうつの宇の
さくれてしと見るもてふれてしとぞ思ふ
らくしうはおとゝ人うめの花やうなりぬ
人をくくていとまんまはの足ぬうつうつ乃人り
桃
ぬうともうれはなきこゝろ
人も物しおこしぞゆふづくよ。殿のあり有明花の色うり。
部玄のうつ〇ぬはいりうれて院はいとれるのゆ（れて
神開
ーてそのさはハいと世ぬしんびこう又まさめ
紛
ゝも物しうへはゆうの物ゝせのぶりハ面ぬまり
ぬはのねなるおとりのさいうしさおりとまゝらとめく
つきとのつゝうこのむ不となりめれてえんあるこゝ
知好
艶
ぬ

り我つくさん中よ。ぬふのあしのひとぐゝとうて
興無
ゆうんうりいとむれ本我ぬりつまてうんゝ勢ぬゝ。
交
かの院はまらひゆゝハうこまてこゝめれとこゝ
いそあひとのいとゝ人のあるさ名我のひぬはとぐゝさ
覧
ぬうとゝ公ゆうゝさハとのゝうゝ媚ぬあゝひゆり
ぬんとやまて見れ人のうゝちにつきぬ こゝの
艶
ゝひふつまれこゝ物ゝうゝのあうゝりまゝ。
こゝのうゝちぬ我もいとんと ぬのこゝたうんハぬよ
ぬうんとゝうゝも侍ゝまゝ。れとうゝりあて
廊
侍れ見ぬゝこゝうひ侍ゝ。女御
后
このれゝうのはそ侍とゝひぬゝふゝれあゝうも物く。

れとこも女をいとまもしこさことなりふうちとぎえの
やうとして名めくしきとはいとあくくしとおけしめ
いとれてすこしもうとんとふ人はおほけちきふく
いそねゆくをなやをくりのこちせんにこすくらんの。
ゐ我もれくしまあ人はこことのくくをせのゐくもなくやん。
あくこやうの人めやをれまにたちうちかこう
へハ中宮の人うれてうりしハよういなしかともいひゆう
なるへ。よらう中らうれはそあるうひきいりさうそ
めれくのこゆるめくさあこしくえのにたあ　めくこさう
にあくをえくくしをえくくとうへえくく
ゆるやうあれと人ハこあれとくくそこあれうとくう

ゆこくくをゆくをうのこくくをれたかのくをれあくそ
ゆるめくう　くれと見くうくとふありくあくんこさあ
くら侍　をくせくしえくゆうこれゆくひもいくのこさ
あくんそく大くゆくくとうくあけなくくもくあくえ
ゆくこれくあはくあれくらくくしくくくくく
おくうまん物我あまくあつくせこあのくくれくまなふ
くもくひいでくくひいでくくんもうゆやをくくちあさ
人ハ世くくかくものくおはくあくひくあくはくん
れくあくと中くくくくく

ありにいひてしてすり名残まこいとあさがをやとふ
れりゆてでんに雅
ちとに名れいきてあるとろ谷ふてきてんどあ先
やとことふあり　くすろれきしふうちこあいて家
人のしをあるもいぞ名れいとうかをひすしさせる紙
まがくなしひよ名ろとてんえて有ゆいまハやうく
おとあひさせ有きに可せのあてきを人のんのれも
けりことすぎるもとれてるとこれはらんしこイ
てこのあ日すれて我あ上人をおにもあるはくこと
ホおしさこれしと思いふへるめうとこるをろしめ
すううてらてもけりてどとうをけせばいを

あ淡くきいことをいてくる物りぞけなりひきれる。
うしてもあるあんとあり。あるのをれとあるひ
なりとうてくスいやうのこんちとりあるまを倒
うとあくあるかうりみあはあ人なり。女院おとやうれ
ぬあくあ月をも月花をとめつ。ひこふのえんあることと
ことのいりあるてもいるんあるゆすちまりを
ぬフしをりきけりりに。てきとをきよあうりひ。
りふれうことをもいひうきれていりへちあく
ぞすんきんなんたてくなりにすとうへくハいひ
かるめうこれうえみ伊るめをなれてえしけ。
かるうれ人のうちうをうきいへとせんうう。答

あくいとゝ成ひさいてんそあやゝしさいとうはてもあるめゝさいとなりさられ成人のんあるゝとハいまゝ侍めりなりさるかあるゝまゝしとあるふくゝ初さ入さるんゝかゝこうむ。又なゝて初ゝけてゝ初ゝひ日爛吟

ゝ初ゝつゝさゝ。それはとふ。れゝくゝのありゝ侍ゝ

ゝさゝひくゝゝちひんゝこゝの。ゝとゝたなゝゝゝまゝハ

ゝ之のゝゝまゝゝゝ侍ゝく。ゝ啓ゝゝゝゝゝゝさゝとゝあゝけゝ

ゝゝにゝゝとゝゝゝゝふこめぬ侍ふゝゝらゝゝゝちハたいめんゝ

侍ゝゝとゝかゝゝゝ又ゝひゝてゝもゝゝゝゝゝ成ゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝ梁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

この文をよみてとうあれ
に侍る。女院ワうの人を
ばりとて見る方のことろあり。ぼくの人はめとゞ
もの後もこゝろめしとおりひあるつゝんう文をうゝ好き。
すゝく人とゞくゝうこはやをくぽう後のちひんこは
難
かゝうゝいとう後ざはおりてまゝ見ゝうゝに人どなき
ふるゝゝど後そゝ誹れ誘ゝ祝ゝ。ぼんのさはのゝそゝ見ゝあゝう
のゝぼいとはらんきう勢まれ容ゝう侍ゝふゝうゝさうゝ。人乃
かくゝゝとゝ見ゝうゝ書ゝ後めをみゝくゝ見ゝそゝて見ゝせゝてゝゝう
ゝゝゝ侍ゝふゝはゝ後ゝうゝゝそゝいゝつゝゝ和泉式部ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つきてゝみちゝゝそれと。笑てゝかうりはゝゝとあり
ぬゝのことゝそれゝゝそゝうゝきくちつれは侍はゝゝも
せハうゝゝるまあハゝゝるれまゝゝうゝゝ侍ゝゝいて。
稲
ゝゝゝ

ゆ、しれこそよりぬひとりことをうちかなでしてゆかけさ
くつろとゆしうしう人やいかんとゆしくなとえ侍
こそどこあもあくまとりも侍まれさうはあ侍しう
くろこすけくうちげうしにさうのことにこむ侍あくら。
んま入あ侍ゆうはことぐうせあもいひ侍めまふ
ちりつりりくぞせてたまし侍とくられさ
まふくびうしへつぞくくをひうこくるまく侍り。
あはくなうづはとも紙ひは花さしをおくつくて侍
めひとうまはゆうあものかりけえもいくひしのす
なりまうゆうしくくひちまてあまてうるくも侍く
とかくつくるにあことものくをとをくくく

數珠
すれとそそくさをしぶとんつくれく足のつさなりと
ぶひ給へさぶろにまセつ（我仕）さこ成えつかたくふ人の
ぶくくりんはつむまして人の中にまてふ
ほしき事を給まとぶてやとおりやぶうまき人はと
ひてやくあるへし（益）物りくこそ（戾）ちし我ぶとれりへう人の
まへまてぶうくきれもものいてもものくゆぶとと
いとしもわろくくえてる人ぶうてぶわるんのたく
つるすちとうくへてぶとはなれりをなりそれんをお
のるおりう事をもれと（北）れとえうへうしひ海と
ねるとふけりぶくうすとれるとつしさ
ふはあれとむつしとおりひくぶきれる人りぶし

なりてくゆまとしかうハとてそそくうきぶとえんは
ものしくぶへはてあくげよぶハくしさうあて。
物（姫）うをこのこうめれ方
祈こきふはやとうんすのとあんぶ浄人くいひおりひつて
ふくこしとみるはあやしれまておいるふ（異）ふと人と
あんおはゆるとそぶるひゆるまるうくぶ人ふうう
おいそ宇おとはれこれも宇るとハ思ひゆまとぶく
これうわるんとあるひりてゆるあるうゆ海ふのおまへ
もいとうちとをてハはてしとなむれりひしうとぶ人
うきふむ（睦）まうなりにるこそこのゆるとるゆ
おりくゆるりぶ（曲）くしくやうしうこぶれまる

人あるとき（側目）めざましくれくゝまし。さうをくて人へ
おいらくふすこゝをそのやふにおもちかめる。
してこゝろ四人とゝもれうくゝ海やを見れ。ハ
名めしくあくゝ見とゝ女性の人うゝくきれく
かゝくゝのためにあるゝ紀さ海せをとゝなりぬ也い
にくうハ侍りまし。我ハとくすゝくゝ（煩ハミキ）ロ（持）紀
ゝとくくしくなりぬる人ハぞちねるつきくゝれうゝい
きゝゝはゝふゝの人ゝハめとくゝまゝめとゝこゝめつれ
くゝかゝのくをすの後いふあゝとゝ中ゝをゝてゝるゝ（言）（行跡）ゝ。
ゝちてゝくうゝゝてにもゝるくゝをくせハ見つきゝ海く
ゝゝふ侍り。西いひすこゝうゝ行くをなりぬる人と。

人乃うゝくゝれとゝめつる人とハゝゝゝゝゝめゝもめをたて
ゝゝゝわゝゝゝゝゝ侍人ゝれ。人のくゝせゝゝかゝゝいゝゝく
ゝゝゝゝゝゝの紫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つくゝまゝゝう侍りゝ人ゝゝゝてすくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

あしうゆりうゑとともさいはあしをとりてうくしうとへハ
堤
あしてうなとのきぐめそへたれはとてはうし。
左衛門
さゑもんのおいしといふ人はうあやうきをうまうう
はりひろもえてをはをくめうさうあとれお
多　後　言
はうこさこえはをうらたうの源氏のものかたり人ふ
一條帝ノ御
ものせはつ少しめしくふこの人ハ日本紀とこそ
をみはへれはなこふをえあへしとの給へせをはなし。
オ
ものとこそとりにいみしうあむさえうあると。為上人おと
オ
ものひちくしをはなにはいとをしきをはなり。
いとれうくそはをあのあるはれかあまくふつくミ
兄　式部カ兄惟規ノ云
はをりの紙ものうあてさえはをぐしいてはをんよこの式ア亟

といふ人のもとハすて史記といふをこそ見はをくしきく
遅
あくひつかの人ハそうそうこそうりつもとくあやし
敏　自身カ躰ヲ云
さまをあそはとしはをうハかをにんをはくらあ
月子　式部カ父爲時ヲ云
うあのこにくりてをぬてそさいをあくりをれとう。
オ
つ孫をあけうれはをうをれとこふををうりある
人ハいうふそやこふやうあくとのこはをうくく人
手筒
のいふををとめてのちいちといふりじとふ紀とて
はをとをいとてつよあさましくはをうをえをぬといひ
きんあめふもかこめをなうてはをあいよくかくうまし
屏風紙
をはをうこいうて人もつて人こうこあくむらんとこつ
こあいひやうあのうこふかこうてうこ紙ふをまあかとし

侍しと宣のたまへすて文集の不くらませ給おとして。
さうはまとしたろしめさせまりしきふおほひスイ
くぶいとものひて人のさうあらめひとくにおとく
乃夏ころうり。樂、傳といふ物こくんとそたとけおく
かうとしへ堪ことさこてさせくとうもかくし隱侍りぬも
ものひさせ給しうと。殿もうちもきしれとあくせ給さく。
ほふことをめてこううくせ給てそ夏ハきくせ給ふ陰とふ
かうとうもせ給ふとすることとこうのものいひの内侍ハえうう
さうへしたうとうハいうふそしこ誘侍らん物とうへて世中
とワさもきくうれものに侍り宣探いふいうハあとくいと
しに侍らしへとい宣ともかくいふともてあうこ佛ま

ふ面こなく經さやうとあるこひ侍らん世のいとりしさてふ
すてつ面ハうり仏とさまきこひなりふて侍れハひしまる聖
あるこんふ宣さいをうもう侍らををこひこちにそむさ懶怠
こもをにうはしめかとのあたうへこやうなん侍へう猶豫
なうれるやをこひ侍りをりこもうこれはとる息
ありまて侍るいさうあれうれいかまてうこめつう
とそこやううまとふもいこたあさまうう侍らん物を。
ふうれ人ものやうるこれといふハあかこうこう真似
ことそりひ侍るそれつこぬこと人ハまこうあるを
しもるひ侍らしへうれの世ふこうあとあこおかく
侍れハよう川ようつきてそう形しう侍うれふこうえてこと

つくけはゝめすとゝ[illegible]もあ[illegible]しも世よたつこと身のうへの
うれへすてものこゝと因えさせとゝ因はしう侍そう。
家しゝめくとゝひゝこゝえさすゝてもゝつゝくへきこゝやい
侍ゝ[illegible]ゝまゝくゝおゝ[illegible]ゝんゝまゝつゝまくゝ[illegible]
ゝれゝらんせよゝ又おゝうんあゝ[illegible]ゝ益ゝくゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝゝかゝせゝゝゝゝ

今様
おほ人の池あり
うと、ありけ
りけるや

ありぬとて、藤原正光卿、あこうりてこまかこつてこそ
いりぬ。たうの御堂のもんりしに、ぼむこふとしあけこう
ぬ。池戸いきふけりたりしに、橋ぬしうらん成
とうてこのたまいねぬ。ありけ扇ひうちまかこ橋いしぬ
ぬ。うぬと、宰相の君おとし物しりしてれ（あきこ。
うちこけめしうちうちこもれしこれくうり。月あか
ろにうしいてぬやうなりぬ君遊いこやううこうこもも
ふ称ぬのうぬこうこ成こうこ成こうこ。
大くらのかあるくこまこすふこうこそ（こ
てまこうあや。このひやうあてあうこうこあこ
うこもこ。ぬこそふこうぬ。おのうち

白川こ集巻
第二日海漫
漫絵福文成
多新誕七九
太上法皇御書

あやまいとはこうこむこひくるこそつきぬこうすや。
太丈徐福文成謝誕に成
こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。
くぬこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こ
うむこうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こ
徐氏の記録ぬこうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こ
こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こ
こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こ

ぬこうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こ
こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こうこ。こ

めうはん　しうさこゝろ　ゆ　こと　あり
こゝろ　ひとれうあ　ゆ　ことに　せそ　ゆ　ゆつ　とめて
月　と　ゆ　ゆ　ゆ

例の事ども
とハ祝詞ノ命
事カタカレノ
ニヲ云

注上
てきいのこゝもいとせをうつくしきにさこゝ侍る。
うへまいとまいつかれなんと有の侍ぬいと祈ぬ
詞
めしなくめとさいなむとうつくしうきこえ給てや
興
給へと。右大将あときうじきこ聖給ふ人はまいり給て。
うへ有とりいてさせ給くぬあをひいりきり有きい
醉
の忘い給てぬ。ぬつゝいとおりひてぬくろ人ねるま
なとれてれ浄まへのれあをひはめしつふぬふいて
餘
いうこゝ侍てにるひくこゝろうるとむうせ有へる。
さこゝうと一ぬつうまるぬやのうまハつ〇乃日
頂
なりぬめくとせあうせあふうちいてんまいとうこと
あらむこゝおうしめれ忘ひあめれぬいとにいろあひ

合
選集春
十主恵宰
子日ところ歌（小
小松のおうりとハ
千代めあ〜ゐ
行、ひうちし

きよけぬかくきこゝ有ふあうまあくぬうこゝ
涼
はすこまけるてひとこゝろれくしまを有うくしく
氣
見をうしふかくむつうこゝまてひうみこれ見有
てそうれくれとれ侍とのこうまこゝあち後ひこと
調
あのつゝまり給。我人注上はふ松乃あうき八とぬうちをし
給あてこうこんこゝうこゝれをあ一れ人のあう有
めてすくあ侍をうせ給ぬ。又の日タつぬつゝかすく
する方後侍くをつきる。行の家ゝあさまてこゝをこ有
のう人乃侍ゝ後かのうれ中つゝれめのとぬ人乃
遊
きこらすこゝとめてこゝこの令物そすのくふえて。
かとくくハ侍る人あれぬうこゝ有はうてぬ二乃家

の五いろし。正月十五日。を。喰さいるまこやねの。あ明げて
てぞ。をしたなくあり。する。ゆ。ゆ。ゆ

しにさはうらしてさうかふ人とり(廉)(く)かしく
ゐこきをひろをすえひうめれありものこうたれ。
むりんのあ成いろよさくろのうこめうすうの日れ
人のさうそくいつもとなくつしうる成神くられおそひ。
ろううう〇すの人しもぶまのわとりいとてそこうの
んさうめ。殿上人はさいてまわるまつとふう。
ろうに宰相(懐平)の君おとくらむたうはめうしさうハ
あくをゆくうれ。さくあるひのちゃんうなうご大夫
ぱくれおね一うれう(まこうをいろごれうすさいつどかれ
すうううあにくゝ源式ァハこれは又こうをいろのあやそ。
うて侍のめうしあうのあるめと見うしとまやそれある

うれれおとうさうなるあしをてそうあやまちろ。
かのれしうんううれとも(餅)えるあ(きれ)うあの
とうはうういはへうこをあるをからねまいるを侍ふ。
ゝもくてぶ(罷出)さいおくまうてくひうれうをあうる
さいはう(書)の女房ハれ丁のあるれりてのひろおまふ。(御座)
とかうれうやうすてるこなうる三位とうう見えく。
内侍のをきうちもあまこまいれう。ゑひ人くハうう(若)
どハぶおきしのしも東のひうこの東れううしうるう
くこをかきうるに上らうハぬうりみてれひんうろ(御簾)
くうはてすこうあうふ大納言れ君ごかねの君ねはへう
おうぶうろ〇ゆれてかうう(平)ハひしおこれ(敷)ぶれ座うれ脇(障子)

ゆりすまこうり。れまんのねしこうこあぬひつくうんこ
ねこ。すのこにふむしきに。ふ。ぬ。ぬ。ぬ

後附

寛弘七年十一月廿八日遷新造一条院　中宮同行啓

寛弘七年

左大臣藤道〃　右大臣藤顯光　内大臣藤公季　左大將

大納言藤道綱　傳　藤實資　右大將　按察使　權大納言藤齊信　中宮大夫

同　藤公任　皇太后宮大夫

權中納言源俊賢　治部卿　中宮權大夫　十二月十七日正二位　中納言藤隆家

權中納言藤行成　皇太后宮權大夫　侍從　同　藤頼通　左衛門督　春宮權大夫

中納言藤時光　彈正尹

參議藤有國　勘解由長官　三月十六日修理大夫

同　藤兼隆　右中將

同　源經房　左中將

同　源頼定

權中納言藤忠輔　兵部卿

同　藤懐平　右衛門督　春宮大夫

同　藤正光　大藏卿

同　藤實成　左兵衛督

左中將藤公信　藏人從四位上　内藏頭

少將藤濟政　十一月廿五日　右中將

藤教通　從四位上　十一月廿八日從　中將如　十五

藤兼綱　從四位下

藤忠經 藏人正五位下 正月七日從四位下

藤定頼 二月十六日元右 十二月七日正四位下

源朝任 藏人從五位下 十一月十五日轉任元右

藤頼宗 十一月廿八日 〃四位下

右中將藤兼隆

源濟政 十一月廿五日任

藤道雅 從四位下

少將源雅通 二月廿日兼 木工頭

藤定頼 從四位下

藤好親 正月七日從五位上 左兵衛佐

藤經親 二月廿五日任 元左衛門佐

源朝任 二月十六日任元少納言 任右

蓋聞斯書紫式部之所記也式部寛弘三年之臘始宦仕中宮後號上東門院是也若其博覽俊才則固世所偏知也其宦仕之間見聞所及進退所經聊注錄以成一書其雅趣藻詞實與源語相爲伯仲然此書本非日次之體而呼之日記者未審姑且依舊題不輙改之其間難解者畧標記傍注以便省讀門人谷村光義

更撮取言五節舞姫之事者以附後而
與本書相發遂附之剞闕以與于門下
之士云爾

享保巳酉年黃鐘中澣　壺井安鶴翁

後補

○大嘗會本朝月令五節舞者淨御原天皇之所
制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄
爾之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣
髴應曲而舞獨入天瞻他人无見舉袖五變故
謂之五節其歌曰乎度綿度茂邑度綿尤備須
茂可良多万乎多茂度邇麻岐底乎度綿尤備
須茂（光義按更有本據在）

○續日本紀聖武天皇天平十四年春正月丁未
朔壬戌天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田

舞訖更令少年童女踏歌○同十五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親舞五節云云

○類聚國史嵯峨天皇弘仁五年十一月壬辰宴侍臣奏五節儛賜祿有差

○本朝文粹善相公清行十二箇條五節舞妓臣伏見朝家五節舞妓者太嘗會時五人即皆預叙位其後年年新嘗會時四人無預叙位之例由是至于大嘗會之時權貴之家競進其女以宛此妓尋常之年人皆辭遁可闕神事爰有新制令諸公卿及女御輪轉進之伏案故實弘仁承和二代尤好内寵故遍令諸家擇進此妓即以為選納之便也諸家僥倖天息不顧摩費盡財破産競以貢進略節

○雲圖抄裏書五節次第也日舞姫等參入裝束畢後預藏人觸其由於貫首大歌參畢後可申歟藏人頭奏聞或令藏人奏次御出頭以下前行秉燭公卿在御後脂燭入大師局殿下入必無次第茵几帳各以具之薫爐持隨髮上相副參入半帖上敷茵茵前立几帳但立舞之時撤件几帳云云次舞姫等參入云云次舞畢退下六位抱之次還御○寅日殿上

淵醉朗詠今樣三獻畢有亂舞（次第略之）同夜御前試預藏人奉仕御裝束尅限大師參上（預藏人催之）次舞姫依次參上（或無次第云云）藏人頭於南殿西腋戶下禁察陪從闕入免入者髮上一人（取几帳）童二人（持薰爐茵等）自餘不參次殿上戶右青璅門閉之不開次主殿官人自北廊列立庭中舉炬火次大歌參上著座次發歌笛次舞畢內侍宣可返御歌之由次藏人頭問大歌人（御物忌之時不問其詞云誰）○卯日宴飲如昨日童御覽奉仕御裝束（后宮御所本宮大夫若親眤公卿宮司奉仕之）次御座定公卿候簀子敷或賜圓座（但不賜故實也）次童女參御前（雲客副之或召扇雲客持參）次下仕參（藏人副之各一所參畢又召他所也）事畢次第退入夜行幸中院（其儀在別）○辰日節會次第畢及三獻大歌發歌笛先是舞姫參上候御後下小忌大盤之後舞姫參上（髮上闈司相副）於第三間列舞主殿女孺四人秉燭照舞畢舞姫退下歌人退下次入御○類聚雜要抄舞姫裝束○廿日赤色唐衣一領織物袿一領茜染打袿一領織地摺裳一腰茜染三重袴一腰扇一枚鞋一足○寅日青色唐衣（加禰）禰芳赤濃裳一腰茜染打袿一重同三

重袴一腰扇一枚錦鞋一足○辰日日蔭髪曼赤紐青摺（砂傳）唐衣一領泥繪裳一腰茜染打袙一重同三重袴一腰扇一枚錦鞋一足○傳唐衣裳○童汗衫袙單表袴下袴扇差櫛物忌（紅薄様）○下仕（シモツカヒ）袿打衣單唐衣裳袴○樋洗（ヒスマシ）上雜仕等裝束略之

○神代巻（磐戸段）猿女君遠祖天鈿女命以天香山之真坂樹爲髪曼以蘿（蘿比云蘿比飼疑）爲手繦（節略）

○延喜四時祭式（供新嘗料）日蔭二荷（節略）

○和名抄苔類蘿唐韻云（日本紀私記蘿比加介）

地よりはえいでくるそのいろ紅もおなじかりかりてとをるまでくろきあるものと

光義

按日蔭ヒカウ蘿ヒカウ又ハ女蘿カツラとも或ハ下苔リガリコケと書ケリ

俗名ハ狐ノ尾ノ苔ノ如キ物ナリ則我雄徳山ノ産多クイヅル物ニテ北山ノ産湿地ニ生ズルモノ

日うけ代神代ハ多繽ハ用ひ来ることなり
延喜式ハ日蔭二荷とあるを是より但後世ハ五て
白糸とよりあゝ合ゝ あまもれるくみさあるひ結と
いひ日蔭乃ゝと名付く男ハ冠乃たゝ
八節 組立一丈二尺計 細 そゝ多り或ハ玉糸を組く
凡組ハ日げゝ組と寸
月ひゝゝ人とあり是とん藁ハさく冠乃かん
ゝはゆゝしゝたゝ なゝ其ん藁とゝ六梅の結
花代作技ハ付ゝ

一日侍于老師校紫式部日記之席以其中
有五節舞姫之事命余録其可與之参考者
故嘗謄寫所聞就而正焉則附之于巻末矣
最不堪赧愧云爾

享保十四己酉年臘月下弦

石清水社士
谷村光義

文政四年辛巳十一月補刻

東都書林　東京小石川傳通院前大門所　青山堂　雁金屋　青山清吉

發賣所　同　支店　神田淡路町通佐柄木町

賣捌所　大阪心斎橋通南一丁目　文海堂　松村九兵衛